アルヒポエータの告解の歌

高津春久

中世最大のラテン語詩人と評価されるアルヒポエータ（Archipoeta）はドイツ人であった。ラテン語で「大詩人」を意味するこの通り名で彼はつねに呼ばれ、その本当の名を私たちは知らない。生年、没年また明らかではない。[1] ただ一一六一年から六七年にかけて、神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ一世の宰相、ライナルト・フォン・ダセル（Reinald von Dassel）の保護を受けて、わずか十篇のラテン語の歌に「大詩人」の名にふさわしい詩才を見せ、その後忽然と消え去った人である。その詩の内容は、彼が帝国きっての政略家ライナルトの身辺にあったため、七年間の政情を克明に伝えて記念碑的である。またその詩は当時の芸術保護者と詩人の心理的関係、遍歴詩人の境遇と生活意識を鮮明に写し出す点で、ヴァルターの詩とならんで最も異色の存在である。わずかに七年間、人間的な心がとらえた中世世界が優れた詩句の中に封じこめられている。さながら未知の闇の、一すじの光に照らされた部分として、それは実に注目に値するのである。

詩人が自らの生まれとその天性について語るのは、わずかに次の四行の詩句に過ぎぬ。

Fodere non debeo, quia sum scolaris　　われは学識ある者ゆえ、土耕すにおよばず。
ortus ex militibus preliandi gnaris;　　もとは戦いなれたる騎士の家の生まれなれど
sed quia me terruit labor militaris,　　われは騎士の労苦を恐れしゆえ
malui Virgilium sequi quam te, Paris.　　なんじパリスに従うより、ヴァージルに付くことをえらびぬ。
(IV, 18)

アルヒポエータは自分を《scolaris》と呼ぶ。これは学校に通うものをいうだけではない。広くアカデミカーをさし、ここでは高位の僧などを含む《litteratus》と同義である。ちなみに騎士階級は《illitteratus》であった。文盲階級から出た有識者には、それなりの苦労がある。この言葉、必ずしも人に誇るためのものではない。騎士の家に生まれたとはいうが、おそらくは地位高からぬミニステリアーレ（家令）の出であったと思われる。彼はこの身分の者が義務とする武術の訓練、実戦への参加をきらった。自分の天性はむしろ学業や詩作にこそ向くことを悟ったのである。ヴァージルは詩作の、またパリスは弓矢の道の代名詞。

彼は多くの優れた人物に見られるように、自分の天分を発見して新しい道をえらんだが、その教育は、ラテン語発音のフランス語訛りがその詩の押韻に見られることから、フランスで受けたと推察される。[2] まず神学の研究より始め、古典文学や修辞学に進んだと思われる。彼の詩は高度な神学教育を前提とするヴルガータやアウグステイヌスの著作からの引用に富み、またホラテイウス、オヴィデイウス、ヴェルギリウスなどの古典詩人の詩句に精通したことを示している。その学識は当時の知識人のレベルをはるかに越えていた。

その生涯にただ一つ大きい期待はずれの体験があった。彼は若いころ医学の研究に転じようとしたことがあ

る。当時のヨーロッパで、医学では最も高名なイタリアのサレルノの大学に遊学することを決意し、この時も保護者ライナルトから滞在と研究の費用を得たと思われる。「サレルノより帰りての御願い」と名づけられる彼の四十二行の詩はライナルトに捧げられている。

En habeo versus te precipiente reversus.
Sit tibi frons leta versus recitante poeta.
(VI, 1—2)

戻ってまいれとの御前の仰せ、早速歌作りまいらせん。
かしこみて句を誦し、玉顔の晴るるを待つ。

という二行に始まるこの詩は、サレルノではからずも自分を襲ったおそろしい熱病のことを語っている。熱に苦しみ、激しい痛みにとりつかれ、体からすべての力が失せた。顔に死相を見とどけた医師からは、もはや生きる見込みはないと申しわたされた。しかしさすがは医学の本場の薬の効きめ、熱はようやく下がった。だが頬の青白さは今でもこうして消えることがない。

Dum sapiens fieri cupio medicusque videri,
Insipiens factus sum mendicare coactus.
Nunc mendicorum socius sum, non medicorum;
Nudus et incultus cunctis appareo stultus;
Pro vili panno sum vilis parque trutanno.

賢明な名医たらんと望みしに
やむなく馬鹿な物乞いとはなりぬ。
はからずもそれがしは医師ならぬ乞食の仲間入り
着るものもなき裸では、誰が目にもたわけ者
ぼろ着ては中身もぼろ、浮浪者におなじ

Nec me nudavit ludus neque fur spoliavit:
Pro solo victu sic sum spoliatus amictu,
Pro victu vestes consumpsi, dii mihi testes.
(VI, 15—22)

博打がそれがしを剝ぎしにあらず
追いはぎが奪いしにあらず
食わんがためわざと衣を奪われたり
生きんがため衣服を売ったに相違ござらぬ。

巧みな言葉の遊戯が痛烈な自嘲の口吻となっている。ぼろといい裸というのは、歌の結びで保護者から施しを請求するための伏線である。いかにも赤裸々な告白の響きが当時としては珍しいものである。何のてらい気もなく、自分を見つめ、丸裸にして語る態度が当時の人びとにも大きい共感を呼んだ。中でも多くの写本の中で《poetae confessio》という題で伝えられる一詩節四行、二十五節の詩はアルヒポエータ最高の傑作である。ドイツ語では「遍歴歌人の告白」《Vagantenbeichte》と呼ばれている。詩人はこの詩の中で、中世の詩としては異例の情熱をかたむけて自分のすべてを暴露している。生身の人間として己がもつ弱さを語り、本能の命ずるままに行動する自分を隠さず、詩的霊感がいかなる時におとずれては去るかを告げている。中世人の心をかくも真近に観察させるものはない。同時代にこの歌がすこぶる愛唱されたことは、彼の他の詩が一つ、または二つの写本によって伝えられるのに、この詩だけは実に三十七もの写本に記されていることからも分かる。おそらくは一一六三年の晩秋、北イタリアのパヴィアの町で歌われたものである。その初めの三詩節は

Estuans intrinsecus ira vehementi
in amaritudine loquar mee menti:

胸さわぎ、腹立ちて
ふかく心に悔いて自ら告白するよう、

factus de materia levis elementi
folio sum similis de quo ludunt venti.

げにわが身は浮薄の元素より成り
風もて遊ぶ木の葉のごとし。

Cum sit enim proprium viro sapienti
supra petram ponere sedem fundamenti,
stultus ego comparor fluvio labenti
sub eodem aere nunquam permanenti.

賢者は動かぬ岩の上に
おのが暮しの座を定めるものなれど
愚かなるわが身は流れ行く河の水
同じ空の下に止まることなき河の水

Feror ego veluti sine nauta navis,
ut per vias aeris vaga fertur avis.
non me tenent vincula, non me tenet clavis,
quero mei similes et adiungor pravis.

さまよえる鳥の、風に運ばるごとく
かじ取る人なき小舟さながらわれは運ばれゆく
われをつなぐかせなく、われをとどむ鍵なし
ただ心おなじき者をもとめ無頼の仲間とはなる。

(X, 1—3)

これを詩人が自分の遍歴生活を称え、自分の自由な生活を世間にむかって宣言する言葉とする読み方があるが、それは当たっていない。聖者はゆるぎない磐石の上に家を建てるのに、自分の心はいつも依りどころなく、時どきの周囲の流れと自分の気分によって動いている。自分を満たしているこの「浮薄の元素」《materia levis elementi》を心から呪うのである。感覚世界へのやみがたい心の傾斜、それは賢者の生活の道でないことを知りながら、自分の本性は止めようもなくそれに引かれる。詩人はさらにいう。陰気に気真面目な考えごとをするの

は、自分の性に合わない。「ジョークは蜂蜜より甘い」（X, 4）と。このような享楽的な精神が熱心にもとめるものは、まず女性との楽しみである。この作者の言葉によれば「ヴィーナスの命ずるところに従うは楽しき勤め」（X, 4）である。この詩はいまわしき自分の本性を省み、告白する態度でうたわれているが、そのような告白を必要とする事情が詩人にはあった。宰相ライナルトは文才豊かな芸術好きな人であった。とくにアルヒポエータの才能を評価し、彼に目をかけていた。ライナルトの身辺にこれを妬むものがおり、詩人の素行、ことに日頃の放蕩ぶりを宰相の耳に入れるものがいた。それに対する申し開きの意味をこの詩はもっていたのである。しかしアルヒポエータはいたずらに自分をとりつくろうことなく、堂々と自分の欠点を分析することから始めている。そもそも初めの告白の調子はこのような事情に反応する口調を感じさせるものであった。

Presul discretissime, veniam te precor:
morte bona morior, dulci nece necor;
meum pectus sauciat puellarum decor,
et quas tactu nequeo saltem corde mechor.
（X, 6）

いと公明正大なる猊下、何とぞ寛大なるご配慮を
それがしはよき死に方、甘き果てようをいたしまする。
乙女らの美しさわが胸を傷つけ
体に触れてはできぬまでも、心の中で彼女らを犯しおりまする。

寛大な裁きを乞うた後、同じ詩節の中でぬけぬけとこのようなことをうたっている。アルヒポエータは時として保護者の前に開き直ることもある。いつも貴人の前に土下座するだけの芸人風情ではなかった。自分の好まぬ詩を書くようライナルトから注文されたとき、それを断わる勇気を十分もっていた。

Res est arduissima vincere naturam,
in aspectu virginis mentem esse puram;
iuvenes non possumus legem sequi duram
leviumque coporum non habere curam.
(X, 7)

自然を押さえるは至難のわざ
乙女見てなおけがれなき心たもたんことは。
われら若者はきびしき掟に従えず
たおやめの体触れではおかず。

詩人の放埒に対する宮廷内の批判に、彼がこのような弁解の詩節で答えているのは驚くべきことである。いわゆる「きびしき掟」《lex dura》とは性欲的生活に対するキリスト教の禁制をいう。それが人の本性に矛盾することは、かねがね学僧たちの世俗文学が指摘するところであった。しかし自分が訴えられて、なおそれが肉体の自然に逆らうことをいうのは挑発的でさえある。詩人の第二の弁解、それはパヴィアの町に向けられる。この詩が作られた町でもあり、詩人の非難さるべき放蕩の、おそらくは舞台ともなった町である。

Quis in igne positus igne non uratur?
quis Papie demorans castus habeatur.
(X, 8)

だれか火中におかれつつ火と燃えざるや
だれかパヴィアの町にありつつ清純ならん

これが何ゆえの問いかけであるか、次の詩節で明らかになる。

Si ponas Ypolitum hodie Papie,
non erit Ypolitus in sequenti die:
Veneris in thalamos ducunt omnes vie;
non est in tot turribus turris Alethie.
(X, 9)

なんじもしヒポリットを今日パヴィアの町におかんか、
明くる日、彼はもはやヒポリットならず。
この町のあらゆる道ヴィーナスの寝室に通ず。
かくも数多き塔屋、なかに一つとて清純の塔はあらず。

パヴィアは、皇帝フリードリヒ一世に事を構えたミラノ、その他北イタリアの町の中で、ただ一つ皇帝に忠誠を誓った大都市であり、かねて皇帝側に立つこの詩人の称賛するところであった。それとともにパヴィアはその訪門者に放蕩の悦びを教える町であった。十二世紀初めに書かれたミラノ市の年代記にも「ミラノは僧侶により、パヴィアは悦楽により、ローマは建築により、ラヴェンナは教会により名高し」とあることで当時の情況を知ることができる。[3] この頃イタリアの富裕な都市貴族は見張りと防衛のため、またその威勢を示すために石造り方形の塔をきそって建てていた。今日なおサン・ジミニャーノの町にそれが残っている。そのすべては不倫な愛欲の巣であると詩人は報じている。ヒポリトスが継母フェードラの誘惑にも応じなかったため、かえって彼女からうらまれ、殺されたことはギリシャ伝説に名高い。この町に足を入れれば堅物ヒポリトスさえ無事ではすまぬ、いわんや、と自分を弁護する。ところでアルヒポエータの日常を監視したものらは、彼が女のほかに賭博にふけることもかぎつけた。

Secundo redarguor etiam de ludo,
sed cum ludus corpore me dimittit nudo,

さらに二つ目の遊びゆえにわれは訴えらる。
賭けごとわれを裸にし

frigidus exterius mentis estu sudo;　身の外は寒けれど、心の中あつく燃ゆるとき
tunc versus et carmina meliora cudo.　つねにも勝りてよき歌と調べ われはつくる。
(X, 10)

せっぱ詰まった窮地に追いこまれ、衣類までも質草にとられるとき、はじめて詩人はよい歌が作れる。彼は自分とは違った人種として、人と交際せず、孤独な禁欲的生活の中で創作にはげむ詩人のいることを別の所で語っている。しかし彼が詩をものにするのは酒を飲んで興奮するか、裸にされるときである。しかも驚天動地の中から生まれる詩句は常以上に優れている。あなたの抱える詩人が並はずれてよい詩を書く動機となる遊びならば、それを許されるべきである。これもまた自分を弁護する詩節である。

女と賭博をうたった後、酒を語らずして詩人の自己告白は終わるはずがない。詩人は飲酒と自分の離れがたい仲を述べること実に九節におよび、三つ目の楽しみを語ることには大へん情熱的である。

Meum est propositum in taberna mori,　わが願いは酒家にありて死なんこと、
ut sint vina proxima morientis ori.　死にゆくわが口にも酒絶ゆることなかれと。
tunc cantabunt letius angelorum chori:　そのとき天使らのいと喜びて歌わん
„sit deus propitius huic potatori."　「この飲兵衛に神のお慈悲あれ」と。
(X, 12)

アルヒポエータの生きた十二世紀、騎士、僧侶の間では飲み屋に出入りすることは、風紀にもとる行為であっ

た。にもかかわらず十一節で彼はそこに通うことをいい、今後も通いつづけることを宣言している。「この飲兵衛に神のお慈悲あれ」。詩人の未期に聞こえるこの天使の合唱の声《Deus sit propitius huic potatori.》は、ルカ伝十八章十三節の言葉「この罪人に神のお慈悲あれ。」《Deus propitius esto mihi peccatori.》に対するパロディーである。この詩人は聖書や教会典礼の用語を、風紀上よからぬことを語るにも大胆に用いている。それを朗唱する時も、教会における僧侶の口調をまねていたと考えられる。彼が何をパロディーしているか、歌を聞くライナルトとその周辺の僧侶には明らかであった。彼らから複雑な笑みを引き出すことがアルヒポエータの狙いであった。

賭博と同じく飲酒もこの詩人にとっては優れた詩を生みだす重要な動機である。作詩と霊感をうながす意味で、この悪習は詩人の場合擁護されるのである。「魂のランプは酒盃によりて点さる。ネクタルに潤う胸、天空を翔りゆく。」(X, 13) とも歌っている。

酒を遠ざけ、人とも交わらず、ひたすら作詩にとり組む詩人などは、アルヒポエータから見れば、気の毒な不毛の歌びとたちである。

Loca vitant publica quidam poetarum
et secretas eligunt sedes latebrarum,
student instant vigilant nec laborant parum
et vix tandem reddere possunt opus clarum.

歌びとのあるものは人と交わることを避け
静けき隠棲の地えらびて
夜も寝ずはげみ、究め、たゆまざれども
ついに傑作を生むことあたわず。

Ieiunant et abstinent poetarum chori,
vitant rixas publicas et tumultus fori
et, ut opus faciant quod non possint mori,
moriuntur studio subditi labori.

（X, 14—15）

これら歌びとの群は飲まずまた食わず、
人の争い、市のざわめきを遠ざく。
名作によりてわが名をば不朽にせんとて
学問の苦しみにより自ら朽ちるのみ。

禁欲の生活によって洞察力をみがく方法もあるかも知れぬ。しかし天は各人に固有の天分を与えるもの、禁欲は自分には無意味なことである。酒の入らぬ自分は、小学生にさえ作文競技で負けるであろう。しかし一たび酒盃を手にすれば、オーヴィドにも勝る詩が書けるのだ。

Mihi nunquam spiritus poetrie datur,
Nisi prius fuerit venter bene satur;
Dum in arce cerebri Bachus dominatur,
In me Phebus irruit et miranda fatur.

（X, 19）

あらかじめ胃の腑の満たされば
われ歌の心にめぐまれず。
バッカスわが脳髄の砦に陣どれば
アポロわが心に攻め入りて不思議を語る。

われわれにとって、また中世の人びとにとっても、この詩の魅力は誠実な自己暴露の語り口にあった。教会の教えに忠実であろうとする一方では、中世人の多くが現世の喜びを受け入れることに解放感をおぼえた。率直な快楽賛美の歌は当時大いにもとめられたのである。そのために二十五節の中から飲酒をたたえる部分が、また人

の身の浮薄の元素より成ることをうたう部分が、それぞれに独立した歌として愛され流布したのである。しかしこの歌は今に伝えられる二十五節の順序で一一六三年の秋、はじめてライナルトの前で披露された。実はこの後につづく第二十節以下の部分が詩人と保護者との関係、詩人をその保護者に中傷した者との現実的な関係に直接ふれている。ここではじめて詩人の存在が日常の宮廷の場でとらえなおされる。

Ecce mee proditor pravitatis fui,
de qua me redarguunt servientes tui.
sed eorum nullus est accusator sui,
quamvis velint ludere seculoque frui.

おん身の従者がわれを難ずるいわれなる
わが堕落の条々、かくのごとく自ら暴きぬ
彼らも戯れなし、現世の喜び得んとすれど
だれ一人自らの罪訴えでるものなし。

Jam nunc in presentia presulis beati
secundum dominici regulam mandati
mittat in me lapidem neque parcat vati,
cuius non est animus conscius peccati.

されればわれらが主の命じられしままに
その心にいかなる罪の覚えなき者のみ
やんごとなき猊下の面前にて
われに石投げるがよし。猊下の詩人とて容赦なかれ。

Sum locutus contra me quicquid de me novi
et virus evomui quod tam diu fovi.
vita vetus displicet, mores placent novi;
homo videt faciem, sed cor patet Iovi.
(X, 20—22)

自らに宿れるなべての罪、わが心に告白せり。
わが内に長く含みし毒吐き出せり。
古き生活はいとわし、新しき暮らし始めん。
人は外面(そとづら)を見れども、神は心を見通さる。

告白の行為の尊さをいい、詩人はここにやいばを攻撃者に向ける。自分と同じく享楽家でありながら、告白する勇気なきものを責めている。二十一節、三行目以下はキリストの周知の言葉《Qui sine peccato est vestrum, primus in illam lapidem mittat.》(Joh. 8, 7)に依る。二十二節の表現は当時の教会における告解の文章範例にしたがう。他の多くの部分と同じく、これもまじめな口吻にパロディーをひそめている。さらに告解を終えた時のよみがえった自分の状態を詩人は次のように形容する。

Iam virtutes diligo, viciis irascor,
renovatus animo spiritu renascor;
quasi modo genitus novo lacte pascor,
ne sit meum amplius vanitatis vas cor.
(X, 23)

今やわれ美徳を奉じ悪徳を憎む、
心よみがえり、気生まれかわり
生まれし赤子のごとく新しき乳に養われ
わが胸もはや空しき思いを宿さざるべし。

新生の人として、今日までの過ちから永遠に放たれ、新しい道を歩む覚悟を語る。これもまた当時悔いあらためた者がそのざんげの終りにいう決まった文句を模している。そして自分を裁かんとする権力者ライナルトから許しをもとめる言葉をもって全体を結ぶ詩節とする。

Parcit enim subditis leo rex ferarum
et est erga subditos immemor irarum,

百獣の王なる獅子も、服するものはこれを襲わず、
従うものにはついにその怒りを忘る。

et vos idem facite, principes terrarum:
quod caret dulcedine, nimis est amarum.
(X, 25)

地上の覇者なるおん身らもこれにおなじき振まいを、
甘味なきものは、とかく口苦きに片よるものなれば。

中世ラテン語叙情詩の傑作の一つと評価されている歌であるが、その表現に周到な計算のあとが見える。今日でもカトリックの教会で行われている贖罪の秘蹟は四つの行為、すなわち懺悔、告解、贖罪、赦免から成っている。アルヒポエータの時代でも同じであった。詩人はこの告白の詩の中で四つの贖罪行為を果たす体裁をとる。冒頭の幾節かで彼は心悔いたものとして現れ、詩の半ばで自らの罪を飲む、打つ、買うの三つとして告解する。終りに近く、今後の新生と改心を誓う。そして最後に寛大な贖罪と赦免を願い出る。詩人は宗教的にもとめられた告解の手順をよく守り、これを履行した。だが過ちを告白しながら、実はそれぞれを詩人としての立場から正当化し、むしろ賞揚し、その矛先を自分を告発した者にむけていた。この詩をいわば宗教儀式のパロディーとするつもりでいた。悔い改め、新しい真人間として生まれかわることを宣言しているが、今後も三つの悪癖はその生涯の伴侶となるであろう。これを理想化する彼の熱心な言葉からも、それは確かなことである。一方で罪を悔い、他方で同じ罪を称える矛盾がこの詩にはある。しかも両者きわめて説得力に富み、熱情的な言葉によって並行している。聞く方はその時々の表現に没入し、ついにこの矛盾にこだわりをおぼえず、最後の詩句まで運ばれるのである。見れば辻つまの合わぬところが方々にある。着物まで博打に入れ揚げ、丸裸になってこそよい詩が書けるといいながら、美味銘酒を腹に入れぬと詩が生まれないというのは両立しない。当時万人の生活指針であり、権威であった聖書の言葉を風刺し、それに自嘲の語を交える。秩序にもとるこのスタイルこそ、作者の人

生、また中世人一般の人生の矛盾をついている。矛盾でありながら、そのどれもが胸にせまる強い響きをもつ。三つの罪科が人間の肉の弱さゆえについに正当化され、肯定される。多くの告白がここでは苦く陰うつな余韻を引いて感動的である。聖書の言葉に通じた当時の人びとが詩人の言葉に思い当たる所あってほくそ笑むとき、彼の言葉はそのような効果をあげる。例えば第二十三節の新生の誓いは、白衣の主日のミサの言葉を背景に持つ。≪Quasi modo geniti infantes, alleluja: rationabiles, sine dolo lac concupiscite, alleluja.≫「さながら生まれ落ちたる赤子のごとく、ハレルヤ、なんじら賢明なものらよ、偽りの心なくひたすら乳もとめよ、ハレルヤ。」アルヒポエータの場合は、詩の表現を出典に合わせたこと自体が問題なのではない。酒におぼれた生活と、赤子の乳をもとめる気持を対立させるため、ことさら神聖なミサの言葉を用いる。詩人の痛恨に皮肉のとげをそえる。享楽と放縦が称えられた後に改悛がこのような形でうたわれる。アルヒポエータの歌には明暗のけわしい対立があり、聖なる素材に本能と悪の影を置き、悪の素材に聖なる影をひそめる技法としてパロディーが用いられる。それによって彼の詩は生の深淵を見る思いを中世人に体験させた。

この告解の歌が作られた翌年、一一六四年の夏、アルヒポエータは先の歌よりも切迫した状況の中で、ライナルトの許しを乞う第二の歌を作っている。この年の夏ライナルトはブルゴーニュの町、ヴィエンヌで会議を開き、席上皇帝側が選出した法皇パシャリスをブルゴーニュの聖職者たちが承認することをもとめたのである。この機会に詩人は第二の告解の歌をもってライナルトの前に現れた。いわゆる「ヨナ告解の歌」(Jonas-Beichte)である。先の歌とこの歌の間に詩人をめぐる情勢がどのように展開したかを想像することができる。彼の放埒な恋の行状を宰相は許すことができなかった。ついに詩人はライナルトの宮廷から逃げだしたのである。しかし一

年足らずで詩人は自分の非をみとめ、頭をたれてもとの保護者の前に現れた。かって自分を評価していた宰相であれば、結局自分は許されるに違いないという期待を彼はもっていた。今をときめく帝国宰相の召集する会議の町、ヴィエンヌの人びとの期待とざわめきの中に、ひとり悄然と現れた己の姿を詩の冒頭に描きだす。その克明な描出と堂々たる調べは中世詩人の中でも抜群の詩作力を示している。

Fama tuba dante sonum
excitata vox preconum
clamat viris regionum
advenire virum bonum,
patrem pacis et patronum,
cui Vienna parat tronum.
multitudo marchionum;
turba strepens istrionum
iam conformat tono tonum.
genus omne balatronum
intrat ante diem nonum;
quisque sperat grande donum.
ego caput fero pronum,
tanquam frater sim latronum,

人声とブラスの響きかまびすし
伝令の高声
各地より集えるものに告げ知らす、
ヴィエンヌの町あげて玉座まいらす御方、
平和の父にして守護者なる
尊き方の来たれりと。
当地の貴顕もあまた集いぬ。
放浪の楽士らの群れさわぎ
すでに音調べを怠らず。
道化の一団は
九日前にこの市に入る。
いずれもあまたの施しを待ちてあり。
われ一人ただ頭(かしら)たれてあり
囚われし盗賊の一味のごとく。

reus inops racionum,
sensus egens et sermonum.
(II, 1—16)

分別失せ、物わきまえる力なく
また物語る力なき罪人(つみびと)として。

失意のうちに力なえて、詩人は幽霊のように現れた。おりしも自分の生死を支配する宰相が間もなくヴィエンヌに来るというので町は沸きに沸いている。詩人が日ごろ軽べつする無教養な放浪芸人たちが施しにあづかろうとライナルト一行を待ちうける。[4] 自分は宰相からきびしく勘当されている。詩人はまことに不利な状況を自虐的な筆で描き出したのである。彼はまず現実的な目で自分のおかれた状態を伝えてから、一転して自分を旧約聖書の予言者ヨナに見たてる。

Nomen vatis vel personam
manifeste non exponam;
sed quem fuga fecit Ionam,
per figuram satis bonam
Ione nomen ei ponam.
(II, 17—21)

かくいえる詩人の名も
またその本名もわれは明かさじ。
逃げてさながらヨナとなりし者に
まことふさわしき喩(たと)え用いて
われこれをヨナと名づけん。

予言者ヨナは堕落したニネヴェの町におもむき、神の警告を伝えるよう命じられた。しかし彼はそれを拒否

し、神のもとから逃がれた。彼がスペインのタルシシに行くべく舟で海を渡ると、にわかに海は荒れはじめた。それがヨナゆえの神の怒りであることを同船の人びとは知った。彼らはヨナをとらえ海中に投げ入れて、主の怒りをしずめようとした。神は一匹の大魚にヨナを呑ませ給い、溺れる彼を救われる。ヨナは三日三晩魚の腹にあり悔いるのであった。神より離れるものは、ついにその恩寵にあずかり得ぬことをここにさとり、彼は主への献身を誓う。主は魚に命じ、彼を陸に吐かせられた。神はふたたびヨナに命じニネヴェにおもむかせ、その町が四十日にして滅びることを予告せしめられた。

詩人はこの予言者の運命を自分の場合にあてはめる。ヨナを呑んだ大魚とは、詩人を宮廷の讒訴から守るため、彼をひとまず追放したライナルトの判断であった。予言者が神の命に従わず、その怒りをこうむったように、詩人は放蕩ゆえに保護者の気嫌を損じた。それで詩人は宮廷から逃がれたのである。また彼は何ゆえ自分の名を秘めるのであろう。当時の絵にえがかれたヨナは、大魚の口から吐き出されたとき、赤子のように丸裸である。頭もはげている。画家はそれによって悔いて新しい人間と生まれ変ったヨナを表そうとしたのである。詩人もまたかつての自分ではない、悔い改めた自分を示してわが名をかくし、ヨナと呼んでいる。ただしヨナと同じく自分も大魚の口から陸に帰るならば、すなわちライナルトが彼を許し、宮廷に呼び返すならば、という希望をそこに寓している。

Lacrimarum fluit rivus
quas effundo fugitivus
intra cetum semivivus,

かつておん身の愛児(まなご)たりしそれがしは
大魚の腹中に逃がれ
半死半生のまま

tuus quondam adoptivus;
sed pluralis genitivus
nequam nimis et lascivus
mihi factus est nocivus.

いま流す涙河のごとし。
されどかのやくざなる、猥りがわしき
複数所有格（婦人所有欲）が
わが身の破滅を呼びぬ。

Voluptate volens frui
conparabar brute sui
nec cum sancto sanctus fui,
unde timens iram tui
sicut Ionas dei sui
fugam petens fuga rui.

この世の楽しみをきわめんとて
愚かなる豚となりはて
おん身のごとき聖者と同席してついに聖ならず。
ヨナが神の怒りおそれしごとく
それがしはおん身の怒りおそれ
逃げ走りてまぬがれんとせり。

(II, 22—34)

放蕩ゆえ宮廷を追われ、悔いのどん底にあって苦しむ詩人の姿が彷彿とする句である。なおこれらの詩句にも詩人得意の誇張《semivivus》「半死半生」、《bruta sus》「愚かなる豚」や遊戯的な地口《pluralis genitivus》「複数所有格—婦人所有欲」が彼の活発な才気を見せてはいるが、先の告解の歌よりも全体的に抑制され、打ち沈んだ口調となっている。放蕩を語る口調はただ後悔するばかりであり、一度は悔いたわが罪をふたたび正当化するような心の反発が見られない。詩は断定的な自戒の語に満ちている。したがって詩人にとっては弁解の余地を残さぬほどの情況があったと思われる。

Reus tibi vereor te
misericordum mihi forte.

おん身に罪犯せしそれがしおん身をおそる。
なれどおん身はそれがしを哀れに思しめさん。

Ecce Ionas tuus plorat,
culpam suam non ignorat,
pro qua cetus eum vorat:
veniam vult et implorat,
ut a peste qua laborat
solvas eum quem honorat
tremit colit et adorat.

見られよ、おん身のヨナは泣きおります。
自ら大魚に呑まるるほどの大罪、
十分に覚えがありまする。
それがし許しをもとめおります。
それがしのつねに称え、おそれ、敬まう御方が
それがしを悩ましき貧苦の患いから
お救い下さること願いおりまする。

(II, 43—51)

哀願の声はいよいよ急である。今や詩人の願いはふたたびライナルトの保護下にいたることに違いない。次の節でいう。「おん身わが罪を許し、大魚に命じたまわば、大魚絵に描かれしヨナのごとく、はげ頭の詩人を吐き出さん。空腹に弱れる彼を目的の港につれ帰らん。彼ふたたび詩人の群に君臨する詩人となりて、おん身を欣喜せしむ詩書き申すべし。」(II, 52—60)「おん身わが罪科を許されなば、われいかなる敵の矢ぶすまも安らけくくぐり申すべし。罪なき者のいただく木づたの冠かぶりて、ご命令のままにいずくへも行かん。ニネヴェの町へもおもむかん。それがしの素行もおさまりて、伝説の教父たちの禁欲にも勝るべし。あまた施さるれば、心こめていといみじき詩御前に書きまいらせん。」(II, 66—75) このように懇願と誓約を重ねたのちに「有体に申

さば、それがしただ今貧の病に悩みおる。過ぐる日、金、馬、馳走、衣服にめぐまれ、来る日も来る日も祝日なりしに、今や乞食のごとくみじめに暮らしおり、日々これ葬式のようでござる。」(II, 76—85) という。ヴィエンヌの町に現れたのは、結局物質的な困窮ゆえであることをつつまずに訴えるのである。そしてパロディーを集中的に用いた一節を全体の結びとしている。

Pacis auctor, ultor litis,
esto vati tuo mitis
neque credas imperitis;
genitivis iam sopitis
sanctior cum heremitis:
quicquid in me malum scitis
amputabo, si velitis.
ne nos apprehendat sitis,
ero palmes et tu vitis.
(II, 86—94)

平和をうち立て、争いを裁く御方、
おん身の詩人に寛大なれ
俗物の言葉信ぜざれ。
例の所有欲しずまれば
それがしは隠者にも勝りて聖(ひじり)ならん。
それがしの内にひそめるすべての悪、
お望みならば、自ら断ち切らん。
ともども喉の乾きに悩まざらんため
われはぶどうのつる、おん身はぶどうの木となれかし。

八十九行の《genitivis》は二十六行のそれを繰りかえして終節でとりあげ、詩人の性欲がみじめな流浪の根源であったことを自嘲的に確かめる。七十二行の「教父たちにも勝る禁欲生活」がここ九十行でふたたび誓われるのも同じ手法である。これら入念な繰りかえしは、この詩を禁欲の誓いとして印象づける。ここには聖書からの

引用句も多いが、本来の神聖な意味を変えて見せようなどという不遜の意図からはほど遠い。「それがしにおいて悪と認められるもの、望みとあらば断ち切らん」が依るところは、マタイ伝五章二十八、九節の言葉「だれにても情欲もちて女を見るは、すでにして心に姦淫す。なんじの右目、なんじに罪犯さしむれば、これ抜きてすてよ」である。過ちのもととなる悪しき器官をのぞく、という聖書のきびしい意味は、この詩の中でいささかも変えられてはいない。また「ぶどうの木とつる」の例えはヨハネ伝十五章、五節の「われはぶどうの木、なんじらはその枝なり、わが内にとどまる者、われがその者にとどまれば、豊かなる実を結ばん」というイエスの言葉のパロディーである。しかしこれもキリストと弟子たちの精神的つながりを、詩人と保護者ライナルトの連帯、そこに生まれる豊かな実り（詩作）をいう言葉とした。これらパロディーの技法には、もはや不遜の片鱗すらみとめられない。

ここで二つの告解の歌にみられる比喩やパロディーの質の変化に注目しなければならぬ。一一六四年の七月、わが身をヨナにたとえたこの歌を、詩人はもとの保護者の前で自らうたうことができなかった。歌の表現からも察せられる通り、詩人が受けた殿の勘気はまだ解けていなかった。彼は同じヴィエンヌの町に身をひそめつつ、浄書された詩を人づてにライナルトに提出し、披見を乞うのみであった。その後も先の主人から許しの下る日を今か今かと待っていたであろう。アルヒポエータはこのような苦しい状況をパロディーの手法にも鋭く反映する。その変化は痛々しいほど感じられる。これほどの鋭敏な対応をそれぞれの作品に示した人は、鈍重な一本調子の歌人が多い時代であればこそ、実に異色の存在であった。彼の告白にある「木の葉のごとくゆれ動く」というのは、品行においてのみならず、まず彼の感情生活や作詩の態度においてこそ当たっている。彼は一瞬ごとに

変化する感性豊かな人であった。彼の時代に詩作する人は多く典拠にもとづいて語るのであった。聖書の一節、ローマ詩人の一句から、日頃の体験に照らして言葉の真意を諒解することが詩にたずさわる仕事の大きい部分をしめていた。しかしアルヒポエータの精神は明らかにその枠をこえて活躍する。たとえその時代の表現の常識にしたがって、典拠によって語ろうとも、彼が結晶した詩句は柔軟な、自由な心の表現となっている。典拠にのぞむ精神が奔放不羈な力を持つので、典拠とその適用の可能性が無限にある。その意外性や誇張の度合いが詩人の心理を表情豊かに反映する。それによって近代の詩人の独自な表現にも勝るレベルに達するのである。

アルヒポエータが残した十篇の詩の中で、詩人の自我がとくに強く表明された二つの作品をえらび、その解釈を試みた。この中世詩人の映像をさらに明瞭な形に完成するため、ライナルトの人物とその行動を調査し、詩人の置かれた環境の詳細な見取図を描いてみなければならない。アルヒポエータの詩で今日伝わるものは、すべて時の宰相、ライナルト・フォン・ダセルに捧げられている。皇帝フリードリヒ一世のいわゆる帝国更生策（Renovatio Imperii）の推進者として東奔西走するライナルトを追い、詩人はヨーロッパ各地に旅し、その行先で詩を発表した。北イタリアのパヴィアに、あるいはブルゴーニュのヴィエンヌに、ドイツのケルンにおいて、彼はこの保護者の傍らにあった。中世詩人とその芸術保護者の関係が、政治日程によってその要点を押さえられ、かなり詳細に確かめられるのはこの二人の場合に限られる。保護者は高名な歴史上の人物であるから、その人柄と経歴を詳しく知ることができる。

ライナルトはゲッティンゲンの北西部、ダセルを領したフォン・ダセル伯爵の第二子として、一一一五年ごろ生まれた。若くしてヒルデスハイム修道院附属学校に学び、さらにパリに遊学し、アベラールの講筵にもつらな

ったと推測されている。ライナルトが図書館から借り出した書籍の名が記録に残っている。それらはいかにもバルバロッサ（フリードリヒ一世）に古代ローマ帝国回復の理想を説き、その夢を強力に政策化した男の思想を培うにふさわしいものであった。同時代の腐敗政治を背景に、過去のローマが持った自由と正義を高く評価するキケロの著作。キリスト教がローマ文化を変容させる有様を嘆きつつ見守っていたストア哲学者の皇帝、マルクス・アウレリウスとその師、マルクス・コルネリウス・フロントの著作。そしてストア哲学者セネカの著書、これらを最も評価していたようである。聖職者としては、まれに見る多方面な才能の持主であった。歴史家カール、ハンペによれば[5]、とくに建築と文学を愛好した。古典文学に精通しているだけでなく、好んで同時代の詩人の作品にも耳を傾けた。人柄は快活であり、交際好き、また世俗の楽しみをよく解した。作品によってわれわれの知るアルヒポエータをまさに受け入れるにふさわしい人であったといえる。

一一五四年、彼に与えられたヒルデスハイムの司教職を辞退したことからも、名誉に淡泊なその性格がしのばれる。彼は自分の資金でヒルデスハイムに誰でも無条件に利用できる病院「新ヨハネ施療院」を建てた。その他多くの寄付行為によって、彼が財にめぐまれ、好んで施したことが想像できる。これまたアルヒポエータが保護者と頼むにふさわしい性格の人であった。一一五六年五月、彼は皇帝フリードリヒ一世の尚書、つまりその宰相となり一一六七年に死ぬまでこの地位にあった。聖職者としての彼は一一五九年ケルンの大司教となっている。周知のようにフリードリヒ・バルバロッサの理想は神聖ローマ帝国を古代ローマ帝国を継ぐものとし、ヨーロッパに帝制ローマの諸制度と皇帝支配の権威を回復することであった。バルバロッサが法皇ハドリアヌス四世に宛てた書簡には「皇帝権なるものは、諸侯の推挙をえて、吾人が神の御手より享けしもの[6]」という注目すべき言葉

が見えるが、これによって皇帝の地位を法皇から授けられたのではないことを断わっている。これ、おそらくは尚書ライナルトの筆になる言葉である。バルバロッサの帝国復権の理想は宰相ライナルトのそれであり、ライナルトによって策定され、推進された。

一一五八年六月の末、アルプス越えの峠に雪がとけるころ、皇帝は十万の騎士と従卒をしたがえて、アウグスブルクを発ち、イタリアに向かう。古代ローマ帝国の諸権利—帝国租税と道路通行税の徴収、鋳貨権、司法権の帝国保有、帝国執政官のイタリア諸都市への駐在など—をイタリアに確立し、これに抵抗するロンバルディア諸都市を罰するためであった。ライナルトは皇帝の査察使としてすでに先発しており、まず要衝ヴェロナ狭谷とヴェロナの町を確保した。さらに周辺の町を説いてこれらの多くを皇帝になびかせ、本軍がイタリア入りしたとき、残された主な敵はミラノ市だけであった。八月にはミラノを攻囲、九月にはその全面降伏と、矢つぎ早の戦果を見た。敗者からは銀九〇〇〇マルクの賠償金を取りたて、それまでこの町のものであった収益権の多くも皇帝の手に帰した。ミラノ市民はあげて今後の忠誠を皇帝に誓ったのである。これによってイタリア全土に皇帝の支配が行きわたり、帝国の諸権利は確立されることとなった。しかしいささか強引に敷かれたこの支配体制は、今後イタリア諸都市の抵抗を呼び、皇帝とローマ法皇の対立を深めることとなる。一一五九年、法皇ハドリアヌス四世の死後、法皇派はアレキサンダー三世を後継者とし、皇帝派の擁立するヴィクトル四世と対立した。一一六四年、このヴィクトル四世が死ぬと、宰相ライナルトは次の皇帝擁立法皇パシャリス三世を立て、アレキサンダー三世に対抗させる。これに先立つ六三年、宰相はアレキサンダー三世から破門を食らっているが、それによって何の痛手も受けてはいなかった。宰相は法皇とイタリアに対する戦いを有利に運ぶために、陰の合従連衡に

も奔走した。英国王ハインリヒ二世と法皇アレキサンダー三世の間に教会問題で確執のあることを知ると、すぐにもルーアンにある英国王の宮廷にかけつけ、王からパシャリス三世支持の約束をとりつけた。さらに英独王家友好のあかしとして、バルバロッサの長子、フリードリヒとハインリヒ二世の娘エレオノーレの婚約までも取り決めたのである。ハインリヒ二世も教会側に対する王権の支配を強くもとめていた。彼はエレオノーレ・ダキテーヌと結婚することによって英仏にまたがる大国に君臨していたので、この同盟の意義は大きかった。当時ヨーロッパ最高の宮廷文化を誇るアングロ・ノルマン王家とドイツを友好関係に置くことにより、ライナルトは間接的にこれにつづく時代のドイツに宮廷文学の黄金期をもたらすこととなった。

ミラノがふたたび皇帝に刃むかったのは一一六二年のことである。その年の三月、皇帝フリードリヒはこの町を攻略征服し、市民を四つの村に移住させ、この町の栄華を地上より抹殺した。翌一一六三年十月、皇帝がノヴァラの町に入城したとき、ライナルトは当代随一のラテン語詩人、アルヒポエータに「皇帝賛歌」(Kaiser-hymnus)を詠進させ、これを皇帝を歓迎する晴れの日のハイライトとしたのである。詩は四行一節、三十四節からなる長篇である。その初めの二節。

Salve mundi domine, Cesar noster ave!
cuius bonis omnibus iugum est suave;
quisquis contra calcitrat putans illud grave,
obstinati cordis est et cervicis prave.

世界の主、われらがカエサル、わが君を言祝がん。
わが君の首木すべて心よき者に負いやすし
君に逆らいて、その首木重しと嘆くは
これぞ心頑なにして、首ねじれたる者ら。

Princeps terre principum, Cesar Friderice,
cuius tuba titubant arces inimice,
tibi colla subdimus, tygres et formice
et cum cedris Libani vepres et mirice.
(IX, 1—2)

地上の主の中の主、皇帝フリードリヒよ
そなたの進軍ラッパ鳴りて敵の城塞くずおれ
そなたの前に出でて虎も蟻も、われらみな頭垂れ
レバノンの杉、野いばら、御柳またなびき伏す。

この歌は予期に反し、皇帝バルバロッサの個性、外貌を叙する具象の語句を持たず、抽象的な皇帝権賛美の歌となっている。ここには先の二つの歌に見る内面的な自己告白とはちがった別の作歌態度が見られる。パトロンの注文に応じて作られた、いわば公式儀礼の歌といえる。だから気を抜いているかというに、そうではない。まず神のごとき皇帝の、地上世界の支配を称える言葉で詩は始まる。皇帝を呼びかけるにも厳粛荘重な言葉をえらんでいるが、いずれも聖書の辞句を想起させる。《dominus caeli》(詩篇三十六章六節)に対してここに《dominus mundi》が、《pater noster》(マタイ伝六章九節)に対して《Cesar noster》が、《ave Maria》(ルカ伝一章二十八節)に対して《ave》がある。皇帝がイタリアから要求した賦課を指す「首木」という言葉も《Iugum enim meum suave est, et onus meum leve》(マタイ伝十一章三十節)「わが首木の負いやすく、わが荷の軽きがため。」というイエスの約束を想起させる。これは皇帝の神格化、その支配の絶対化を意図する詞章といえる。第二節は人びとの記憶にも新しいミラノはじめロンバルディア諸市の、皇帝軍による征服をうたう。ただしラッパの音の振動に城塞がくずれる故事は旧約ヨシュア記六章にあり、これによってミラノの敗北が神慮によることをいうのである。さらに百獣草木まで皇帝の前に服するのを見ては、昔の帝権神授の伝説も思い出される。詩人

の言葉はひたすら皇帝を聖化するため費やされた。皇帝権というものについて宰相や皇帝がいだいた概念こそ、この詩が表す神聖なイメージに一致する。それはやがてシュタウフェン王朝の政治行動の根抵をなす思想となった。一一六五年、バルバロッサがカール大帝を列聖したのも、古代ゲルマン的神政政治を、アウグスティヌスの説く「神の国」の実現と見たて、両者の統合をはかろうとしたのである。神が天を統べるごとく、皇帝は地上を統べるという皇帝の見解は、本来権力政治の意図をふくむものではない。自分は神によって帝位を与えられたものである。自分が地上に神の正義を樹立するため働いている間、法皇の行動はただ宗教の分野に限られるべきだというのである。この詩の内容の大略をここに記す。

「神は主上をすべての王の上に置かせられ、キリスト教世界を守らしむべく復讐の剣と楯を主上に手渡された。かくてわれらみな主上に恩義あり、主上のもとめられる租税を納めねばならぬが、貧亡詩人のそれがしは手に無一物。ここに一篇の歌をたてまつり帝の誉れをたたえ、日ごろのご恩返しとしたい。神により塗油された御方を、ふさわしくほめ称えんため、ねがわくはキリストの精霊のわが心を満たさんことを。主上は大地の重荷をひとりの御力にて支えられ、ローマ帝国を昔日の品位に返す御方。世々の皇帝の怠慢かさなり、帝国には背徳者のいばらはびこり、ここにロンバルディアの刃むかうあり、この地の町々財をほこり高き塔建て、皇帝の威にそむき、完全なる自由もとめ、年貢と税を拒絶せり。神の命ありて、皇帝フリードリヒ怒り立ち給いぬ。敵には脅威、あばれ獅子さながら。復讐の槍にて敵刺せる立派な主上の御姿は、昔日のカール大帝のよう。帝国の秩序回復、町々からの租税の取りたて、これぞ神の御心にかなう事業。まずパヴィアの町主上に服し、つづいてはノヴァラの町も、ミラノの傲慢こらしめんため協力を申し出る。ノヴァラの町の栄光はわが詩句により不滅なり。

ミラノの町の栄華のほどは、たとえ全ギリシャ軍のアキレスを伴い来たりて、千年攻囲するとも落ちぬばかりなりしが、ついに主上の威力にて町もついえぬ。イタリアの街道はかねてより盗賊の出没して危うけれど、いまや帝の御威光により平和と正義あまねし。われらの宰相ライナルト様は主上の行く手のいばら打ち払い、道広げ、この地に皇帝の首木かけ給いぬ。われをも貧窮のどん底より救い給いぬ。けだかき帝は今日までのごとく行ないたまい、帰服せる者を助け、逆らえる者を撃たるべし。」

この歌は皇帝を激れいし、宰相が計画するイタリア南下政策を支持する言葉で終わっている。しかし情熱的な皇帝賛美の陰にひそむ批判的な声をその行間に読むこともできよう。二つの自己告白の歌から陰影にとむ皮肉と深い真実を聞き知る者は、ここに詩人の称賛と肯定のみを読むことができない。ブリンクマンはこの歌を「バルバロッサの君主としての偉大さを熱狂的に称える賛歌」と評したが、ヘールはこれをうたった詩人を「ライナルトの仕組んだミサをとり行う司祭」にすぎぬとし、さらにこの詩を「ライナルトの国策プロパガンダを、遍歴歌人に金を与え、詩に作らせたにすぎぬ」ときめつける。(7) このような公式の儀礼歌におけるアルヒポエータの制作態度は、むしろ彼の詩と人柄についての全体的評価を決める鍵となろう。この皇帝賛歌の制作には詩人の心がどの程度に、またどの角度から関与していたかを考えねばならぬ。詩句の力強さ、上の空ではとうてい生みだせない情熱的な言葉からも、作者の精神の関与については疑うべきではあるまい。彼はおそらく影響力の強いこの宰相の精神の圏内でつねづね生活し、その帝権神授の信念にも深く共感するところがあったと思われる。また表面の称賛のため、詩人が個人的な信念を曲げたと思われる節はこの歌のどこにもない。しかしここには皇帝のイタリア政策のあり方にある批判的なものが表明されているといえる。皇帝の果敢な行動への誇大ともいえる賛美

と、その中に伏せられた警告がここに共存するのは驚くべき事実である。皇帝の行動が、本来彼の理想とするアウグステイヌスの clementia（寛容）を失い、その政策に抵抗する者らへの復讐に変っていくのを彼は見た。理想の統治をもとめて起こされた行動が、現実には非道な武力政策に落ちいる危険を詩人は見のがしていない。詩の結びはライナルトの先導的な役割をたたえ、皇帝に今まで通りの政策実行をもとめる二つの詩節である。だがこれを単純な賞賛や激れいと解するには、本来アルヒポエータの詩想の裏面や奥行きが深すぎるというべきであろう。むしろ皇帝のイタリア統治が投げる今後の重大な問題を予告して詩を結んだと見るべきである。

それゆえこの歌の心は「ライナルトが皇帝をかつぎ、本来は精神的、宗教的理想でもあるローマ帝国の復興を権力政策の方向に誤らせている。皇帝の首木をかけているのはライナルトの手である」というのではないか。終節二行目に見のがすことのできぬ一句がある。《sicut exaltatus es, exaltare magis！》「主上よ、今日までたどり来し登り坂、さらに登りつめたまえ。」ここには一つの警告が伏せられているであろう。ローマの昔から人の運命の変転は、まわる車輪に乗る人の上り下りにたとえられた。十三世紀に書かれた写本の中の運命の女神の車輪には、同じ人物が輪の上下左右に描き分けられ、そのヘクサメーターの添え書きにいわく「われ王者ならん。われついに王者なり。われ王者なりき。われ王者ならず。」またこの賛歌の中で皇帝は獅子に、庶民は虎と蟻にたとえられている。これによって当時の人はまず動物寓話を思いうかべたであろう。しかも有名な物語「狐のライネケ」の中で蟻の演ずる役割は、獅子王の脳味噌にもぐりこみ、動物王国をかき乱すというのである。(8)

ここには強者にしたがいつつ、つねに精神の自由を失わなかった不羈の魂がある。詩人は相手の出方に柔軟に応待することを知っていた。その時どきに許された形で自己主張することを怠らない。そもそもこの賛歌は、か

ねてライナルトから執筆を依頼されていた叙事詩の代りに作られたものである。先の依頼というのは、皇帝のイタリア遠征を賛美する長篇の叙事詩であった。皇帝がドイツからイタリアへ帰ってくるとき、歓迎の意味でそれは発表されるはずであったが、制作にかけられる時間は一週間にすぎなかった。一一六三年初秋に作られたと見られる「バルバロッサ武勲詩の執筆を拒絶する歌」(Ablehnung des Barbarossa-Epos) という彼の歌がある。その歌にいう。

Vis ut infra circulum parve septimane
bella scribam forcia breviter et nane,
que vix in quinquennio scriberes, Lucane,
vel tu, vatum maxime, Maro Mantuane.

御前のお望みとはそれがしわずか一週間で
力強き戦いの有様簡潔に記すべしと。
ルカンよ、また至高の詩人なるヴァージルよ
おん身ら五年がかりにて書くあたわざるものを。

Vir vivovum optime, parce tuo vati,
qui se totum subicit tue voluntati;
precor, cum non audeam onus tantum pati,
ut rigorem temperes ardui mandati.

男子の鑑たる御方、おん身の意志に
全身全霊そいまつるおん身の詩人をいたわりあれ。
かような仕事お受けすることかなわぬゆえに、
この難題のきびしさ、ちと和らげ下さりませ。

(IV, 5—6)

平身低頭の辞退は、当時の詩人が依頼にそえぬとき、保護者に対する一応の礼儀である。ここではむしろ詩人ができぬことをできないといった率直さを評価すべきであろう。それが必ずしも才能の及ばぬための断わりでは

ないことを、誇り高い詩人はおなじ歌の中でいう。「ときにはそれがし千行の詩句も一瞬にして賦し、いかなる詩の名手にもおくれをとらぬ。されどほどなくそれがしの脳は眠りにとらわれ、歌忘れしわが心より詩句はやくも去りゆく。」（IV, 8）瞬時にして詩想にめぐまれ、多産の時を迎えるかと思えば、ふたたびミューズに見放され、凡人の心にかえる。こういう特異体質の歌人であるため、提出期限まであと一週間の長篇叙事詩の制作はお断わりである。歌の主題が詩人の心を十分燃焼させるに足らぬものではなおのことである。この制作拒絶は詩人の自分に対する忠実さを物語っている。

宰相に対する詩人の関係はたしかに外見的には従属的であり、おもねりさえ見せている。にもかかわらず詩句の細部に観察を深めると必ずしもそうではない。その内面で彼は保護者に対する自由を保持していた。詩人に向かって外からの圧力が高まるとき、彼の詩句は身を守って完全な服従をよそおう。持ち前の反骨は詩句の奥深くにかくれ、それを読みとり、謎解きすることはなかなか難しい。ヨナの告解の歌と皇帝賛歌はこの自由の詩人が実に大きい不自由を強いられたときの歌である。これらの詩の中には言葉の真意を十分に測りえた、となおいいきれぬ部分も多い。およそ彼の詩を読むときほど、困難な人間関係の中で、服従してなお自由であることの意味を考えさせるものはない。遍歴歌人のもつ非凡な生活力と不屈の精神にふれる思いがする。

その詩のほとんどは、当面のテーマをうたった後、ライナルトに施しを要求している。「何か結構なもの」をいただきたいとか、衣服、外套、金が欲しいという。最高に相手をほめ上げたあとでこんな無心をいう。新しく作った歌とメロディーへの当然の報酬として彼はそれをもとめている。比較的自由な気持で歌うことのできた最初の告解の歌の中に、注目に値する二行の句がある。

nihi sapit dulcius vinum de taberna
quam quod aqua miscuit presulis pincerna.
(X, 13)

酒家にて飲む酒は、宰相の宮廷にて
酌取りどのが水割りて出す酒よりうまし。

宰相が詩人に飲ませる酒はいつも水割りだったようである。あれには不断から辟易しております。それがし宮廷にて御前のお相手をつとめるより、飲み屋にたむろする時間が長いのも無理はございません、という意味である。初めの告解の歌が作られたとき、詩人と宰相の間にはまだこんなことまで自由に話せる空気があった。宮廷の広間から聞こえる二人の談笑の声、身分の上下をこえた教養人の肝胆相照らす交わりが手にとるようである。

しかし運命の輪はめぐる。一一六七年五月末、ローマに入った皇帝軍は少数の精鋭でよく法皇軍を破り、パシャリス三世を法皇とし、先の法皇アレキサンダー三世はローマから逃げ出した。だが凱旋のさなか皇帝軍は思いがけぬ破局を迎える。八月、突然の豪雨が焼けつく熱気の中でマラリア熱を発生させ、皇帝軍はまたたく間に二千以上の騎士を失った。皇帝自らも熱を病んだが、ようやく残兵をまとめて撤退。ロンバルディア地方の町々はこのとき皇帝の租税をまぬがれるため一斉に蜂起する。その中を抜けて皇帝はブルゴーニュを通過し、一一六八年ようやくドイツへ逃れることができた。ライナルト・フォン・ダセルはこのときのマラリア熱の犠牲となってローマに死んだのである。宰相なきあと、アルヒポエータも詩の世界から姿を消した。一介の遍歴詩人のことを年代記が記録するはずもなく、その後の彼の消息は知るよしもない。あるいは彼もその保護者と共にマラリア禍に命を絶ったとも考えられている。

〔注〕

本稿にあげるアルヒポエータの詩のテキストは次の版から引用した。

Die Gedichte des Archipoeta, kritisch bearbeitet von Heinrich Watenphul, hrsg. von Heinrich Krefeld. Heidelberg 1958

また引用のローマ数字は作品番号を、アラビア数字は行数または節数を示す。

(1) この詩人の国籍についてまったく疑問の余地がないわけではない。判断の根拠となるのは《Et transmontanos, vir transmontane, iuva nos!》(Ⅲ, 14)「山のかなたに住まえるおん身は、われら山のかなたに住む者を助けたまえ」とライナルトに呼びかける句である。イタリアで作られ、そこでライナルトに捧げられたこの詩のいう「山のかなた」とは、アルプス以北をいう、それはフランス、英国、ドイツを含む神聖ローマ帝国の全域をさす。しかしこの句は同国の生まれのよしみから宰相の援助を乞うのであるから、詩人をライナルトと同じくドイツ人とするのが正しい。アルヒポエータをロマンス語系の生まれと見る説の多くは明確な論拠を持たない。

彼の詩を伝える重要な写本、ゲッティンゲン・コーデクスはそれぞれの詩の上に作者の名を「アルヒポエータ」と記している。彼が詩の中で自分を《vates vatum》(Ⅱ, 59)「詩人の中の詩人」と呼んだため、周囲が彼にこの名を与えたと推理されている。ヤーコプ・グリムの説はことなる。アルヒポエータという名は Archikanzellarius「大宰相」かかえの詩人であることを意味したのであろうという。この名によって他の流しの芸人たちから彼を区別する意味があったであろう。この説には支持者が多い。

詩人の生年没年の推理も不可能ではない。彼は詩の中で自分はもはや《puer》「少年」ではないといっている(Ⅰ, 35)。また自分を《iuvenis》「壮年者」と呼ぶときがある(X, 5)。当時少年とは十七歳までをいい、壮年とは二十八歳から五十歳までをさした。しかももはや少年でなく壮年とは、二十八歳をこえたばかりといえよう。第一の歌の成立を一一六〇年、第十歌のそれを一一六三年とすれば彼の生年を一一三〇年ごろと見てよい。一一一五年生まれのライナルトより十五歳ばかり若かったといえる。没年については一一六七年にライナルトと同じ病を得てローマに死んだとする

推理がある。

(2) J. J. A. A. Frantzen, Die Gedichte des Archipoeta. Neophilologus V (1920) S. 171 ff.

(3) Landulf von Miland, Mailänder Geschichte Ⅲ, 1.

(4) Doleo, cum video leccatores multos　まるで役立たずが、おろかしい
penitus inutiles penitusque stultos,　大勢のたかり者を見てはわが心がいたむ。
nulla prorsus animi racione fultos,　いかなる智恵、分別のそなえもなく
sericis et variis indumentis cultos.　ただ絹、綺羅にておのれを飾る者ら。
(Ⅳ, 23)

大勢の無教育な芸人が宮廷に居候する。彼らはにぎやかなだけの愚劣な歌や芸当で、うまい食事や美服にありつこうとする。高貴な方がた、かような者どものろばの体に獅子の皮を着せてはなりませぬ。奴らが一たび名声を手にすれば、敬虔な心を失いまする。こういってアルヒポエータは放芸人を誹ぼうしている。

(5) Karl Hampe, Deutsche Kaisergeschichte in der Zeit der Salier und Staufer, 10. Aufl. Heidelberg 1949 S. 158.

(6) Otto Bischof von Freising und Rahewin, Die Taten Friedrichs oder richtiger Cronica, übers. von A. Schmidt, hrsg. von F. J. Schmale. Darmstadt 1965 S. 421.

(7) Hennig Brinkmann, Die Dichterpersönlichkeit des Archipoeta GRM. 13 (1925) S. 107.
Friedrich Heer, Die Tragödie des Heiligen Reiches. 1952 S. 80.

(8) Reinhart Fuchs von Heinrich dem Glîchezaere. 1835 ff.

〔付記〕
本稿は、昭和五十四・五十五年度文部省科学研究費補助金（研究課題番号四四五〇四〇）による研究の一環をなすものである。